

社会科学系の大学生，教員，および卒業生を 対象にした英語学習に関するニーズ分析

カレイラ松崎順子

要 約

本研究は社会科学系の学生，彼らに英語を教えている教員，および卒業生を対象に英語学習に対するニーズ分析を行い，学生・教員・卒業生それぞれが英語学習に対してどのような考えを持っているのか，さらに，三者間ではどのような相違点が見られるのかを調べた。その結果，以下のことが明らかになった。第一に，コミュニケーション力を高めるような英語の授業やビジネス関係の英語を学ぶ授業が学生・教員・卒業生ともに必要であると感じていることが明らかになった。第二に，学生・教員のほとんどが「文法力」を高めたい，高める必要があると思っているが，一方で卒業生は職場において「文法力」はあまり必要がないと感じていることが明らかになった。また，「TOEICに関する試験対策」に関しても多くの学生・教員が必要であると回答していたが，卒業生は半数程度であった。すなわち，学生と教員間においてあまり相違点は見られなかったが，卒業生の職場の状況や卒業生の考えとはいくつか異なる点が見られた。

はじめに

ニーズ分析とはシラバスやカリキュラムを開発する際に言語のニーズについての情報を体系的に集めることであるが (Richards, 2001)，ニーズ分析には①ディスコース・コミュニティーのニーズ，②教員・大学のニーズ，③学習者のニーズの3つの領域があるといわれている (深山, 2000)。ディスコース・コミュニティーとは「専門家集団と訳され，この集団内で英語が使用される場合，例えば弁護士同士や医者同士のコミュニケーションと，この集団と外の者として英語が使用される場合，例えば医者と患者のコミュニケーションがあげられる」(寺内, 2005, p. 21)。①ディスコース・コミュニティーのニーズおよび②教員・大学のニーズは，学習者が目標言語を使う状況を特定しそれに基づいてニーズ分析を行う目標状況分析であり，専門分野の教員や卒業生対象のアンケートなどからコースの学習目標を設定

社会科学系の大学生，教員，および卒業生を対象にした英語学習に関するニーズ分析

する（深山，2000）。一方，学習者のニーズは現状分析であり，学習者の学習スタイルや英語に対する態度などを問う質問紙調査を行い，学習者に適切な指導法や学習スタイルなどを決定するのに参考にする（深山，2000）。

ところで，これらのディスコース・コミュニティー，教員・大学，および学習者の三者間のニーズにはどのような相違点があるであろうか。本研究では社会科学系の学生，彼らを担当する英語教員，さらに卒業生を対象に英語学習に関する調査を行い，学生・教員・卒業生それぞれが英語学習に対してどのような考えを持っているのか，さらに，三者間においてどのような共通点・相違点が見られるのかを明らかにしていくことにした。

ニーズ分析

言語教育におけるニーズ分析の研究は1960年代から1970年代にかけて始まったとされ（Richards, 2001），言語教育の分野において様々なニーズ分析が行われてきた。特に，学習者を対象にしたニーズ分析は多く行われている（e.g., Karimkhanlouei, 2010；中野，2005；吉重，2005）。

一方，教員や卒業生を対象にした研究は少ないがいくつか行われており，たとえば，Kaewpet（2009）はタイの土木工学の卒業生，専門教員，雇用主，土木技師に対してニーズ調査を行っている。Kikuchi（2005）は学生および教員を対象に調査を行った結果，学生は英文和訳が最も効果的な学習方法であると思っているが，教員はあまり効果的であるとは考えていないなど，学生と教員との間に英語学習に対する認識に違いがあることを指摘している。その他，清水・松原（2007）は経済学部卒業生に対してニーズ分析を行い，卒業後職場で必要とする英語力は「読む力」であることを報告している。

本研究

目的

本研究の目的は，社会科学系の学生，彼らに英語を教えている教員，および卒業生を対象に英語学習に対するニーズ分析を行い，学生・教員・卒業生それぞれが英語学習に対してどのような考えを持っているのか，さらに，三者間においてどのような相違点が見られるのかを明らかにしていくことである。なお，以下のようなリサーチ・クエスチョンを設定した。

1. 学生が卒業までに身に付けたい英語能力，教員が卒業までに身に付けさせたいと考えている英語力，および卒業生が職場で必要としている英語力はどのようなものであり，さらに三者間にはどのような共通点・相違点が見られるであろうか。
2. 学生が受講したいと思っている英語の授業，教員が行うべきであるとする英語の授業，

および卒業生が大学時代に受講しなかった英語の授業はどのようなものであり、さらに三者間ではどのような共通点・相違点が見られるであろうか。

調査協力者

調査協力者は、東京都内の私立大学の社会科学系の学部属する大学1年生の595名（経済学部260名、経営学部245名、現代法学部90名）、彼らの英語を担当する教員9名、および卒業生34名（経済学部卒業19名、経営学部卒業13名、現代法学部卒業1名、短期学部卒業1名）である。卒業生の現在の職業は製造業・建築業6名、金融・保険・不動産業5名、流通・販売業4名、ソフトウェア・情報処理3名、運輸・通信・電気・ガス2名、上記以外のサービス業7名、記述なし7名である。

質問紙

学生に対する調査

学生に対する調査は2012年7月上旬から下旬に行った。使用した質問紙は「卒業までに身に付けたい英語能力」と「受講したい英語の授業」である。「卒業までに身に付けたい英語能力」は清水・小山田（2001）を参考に計9項目の尺度を作成した。「受講したい英語の授業」はカレイラ（2009）を参考に計10項目を作成した。さらに、本研究では「どのような英語の授業を受けたいか」について問う自由記述式の項目も設けた。

教員に対する調査

学生に行った「卒業までに身に付けたい英語能力」と「受講したい英語の授業」を教員用に表現などを変えた質問紙「本学の学生に身に付けさせたい英語能力」（計9項目）と「本学で行うべき英語の授業」（計10項目）を2012年7月上旬から下旬に行った。さらに、「どのような英語の授業を行うべきか」について問う自由記述式の項目も設けた。

卒業生に対する調査

学生と教員に行った「卒業までに身に付けたい英語能力」と「受講したい英語の授業」を卒業生用に表現を変え、卒業生に対しては現在の仕事で使う英語の使用状況を把握するために「仕事で現在必要とする英語能力」（計9項目）を問う質問項目と「大学時代に受講しなかった英語の授業」（計10項目）に関する質問紙調査を行った。さらに、「大学時代にどのような英語を学んでおくべきであったか」について問う自由記述式の項目も設けた。

データ分析

上記のすべての項目は「あてはまる」、「まあまああてはまる」、「あまりあてはまらない」、

社会科学系の大学生，教員，および卒業生を対象にした英語学習に関するニーズ分析

「あてはまらない」の4件法を採用し，各選択肢に回答した人数と割合を学生，教員，および卒業生別に調べた。

結果

英語能力に関する結果

表1 聞く力

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合	人数
あてはまる	76.0	452	88.9	8	32.4	11
少しあてはまる	21.2	126	11.1	1	23.5	8
あまりあてはまらない	1.8	11	0	0	14.7	5
あてはまらない	1.0	6	0	0	29.4	10
合計	100.0	452	100.0	9	100.0	34

学生の約9割，教員は全員が，さらに卒業生の約5割が，英語の「聞く力」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表1を参照）。

表2 話す力

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	76.4	454	88.9	8	32.4	11
少しあてはまる	20.4	121	11.1	1	23.5	8
あまりあてはまらない	2.0	12	0	0	14.7	5
あてはまらない	1.2	7	0	0	29.4	10
合計	100.0	594	100.0	9	100.0	34

学生の約9割が，教員は全員が，さらに卒業生の約5割が英語の「話す力」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表2を参照）。

表3 読む力

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	69.5	411	88.9	8	35.3	12
少しあてはまる	27.1	160	11.1	1	35.3	12
あまりあてはまらない	2.4	14	0.0	0	17.6	6
あてはまらない	1.0	6	0.0	0	11.8	4
合計	100.0	591	100.0	9	100.0	34

学生の約9割が、教員は全員が、さらに、卒業生の約7割が「読む力」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表3を参照）。

表4 書く力

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	64.3	382	66.7	6	21.2	7
少しあてはまる	29.0	172	33.3	3	24.2	8
あまりあてはまらない	4.9	29	0.0	0	30.3	10
あてはまらない	1.9	11	0.0	0	24.2	8
合計	100.0	594	100.0	9	100.0	33

学生の9割弱が、教員は全員が、さらに、卒業生の約4割が「書く力」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表4を参照）。

表5 文法力

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	63.9	379	88.9	8	17.6	6
少しあてはまる	28.2	167	11.1	1	29.4	10
あまりあてはまらない	6.2	37	0.0	0	29.4	10
あてはまらない	1.7	10	0.0	0	23.5	8
合計	100.0	593	100.0	9	100.0	34

社会科学系の大学生，教員，および卒業生を対象にした英語学習に関するニーズ分析

学生の約9割が，教員は全員が，さらに，卒業生の約4割が，「文法力」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表5を参照）。

表6 発音

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	59.2	352	44.4	4	23.5	8
少しあてはまる	30.1	179	44.4	4	29.4	10
あまりあてはまらない	8.9	53	11.1	1	17.6	6
あてはまらない	1.8	11	0.0	0	29.4	10
合計	100.0	595	100.0	9	100.0	34

学生の約9割弱が，教員の約9割弱が，さらに卒業生の約5割が「発音」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表6を参照）。

表7 語彙力

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	74.2	439	88.9	8	21.9	7
少しあてはまる	22.6	134	11.1	1	40.6	13
あまりあてはまらない	2.7	16	0.0	0	12.5	4
あてはまらない	.5	3	0.0	0	25.0	8
合計	100.0	592	100.0	9	100.0	32

学生の約9割が，教員全員が，さらに，卒業生の約6割が「語彙力」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表7を参照）。

表8 英和翻訳

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	60.4	357	33.3	3	25.7	9
少しあてはまる	28.4	168	55.6	5	34.3	12
あまりあてはまらない	8.0	47	0.0	0	20.0	7
あてはまらない	3.2	19	11.1	1	20.0	7
合計	100.0	591	100.0	9	100.0	35

学生の約9割弱が、教員の全員が、さらに、卒業生の約6割が「英和翻訳力」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表8を参照）。

表9 和英翻訳

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	57.9	343	33.3	3	32.4	11
少しあてはまる	30.7	182	33.3	3	17.6	6
あまりあてはまらない	8.1	48	22.2	2	23.5	8
あてはまらない	3.2	19	11.1	1	26.5	9
合計	100.0	592	100.0	9	100.0	34

学生の約9割弱が、教員の約6割が、さらに、卒業生の約6割が「和英翻訳力」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表9を参照）。

大学の英語の授業に関する質問紙調査

以下は学生、教員、および卒業生に対する大学の英語の授業に関する質問紙調査の結果である。

社会科学系の大学生，教員，および卒業生を対象にした英語学習に関するニーズ分析

表 10 英字新聞やニュースなどの時事英語を学ぶ

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	20.4	121	22.2	2	53.6	15
少しあてはまる	36.1	214	66.7	6	25.0	7
あまりあてはまらない	31.9	189	11.1	1	10.7	3
あてはまらない	11.5	68	0.0	0	10.7	3
合計	100.0	592	100.0	9	100.0	28

学生の約 5 割が，教師の約 9 割弱が，さらに，卒業生の約 8 割弱が「英字新聞やニュースなどの時事英語を学ぶ」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表 10 を参照）。

表 11 インターネット上の情報を英語で学ぶ

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	18.5	110	22.2	2	55.2	16
少しあてはまる	36.4	216	55.6	5	17.2	5
あまりあてはまらない	32.0	190	22.2	2	17.2	5
あてはまらない	13.0	77	0.0	0	10.3	3
合計	100.0	593	100.0	9	100.0	29

学生の約 5 割が，教員の約 8 割弱が，さらに，卒業生の約 7 割が「インターネット上の情報を英語で学ぶ」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表 11 を参照）。

表12 英語での電子メールなどの書き方を学ぶ

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	19.3	114	0.0	0	44.8	13
少しあてはまる	34.9	206	88.9	8	24.1	7
あまりあてはまらない	32.7	193	11.1	1	13.8	4
あてはまらない	13.1	77	0.0	0	17.2	5
合計	100.0	590	100.0	9	100.0	29

学生の約5割が、教員の約9割弱が、さらに、卒業生の約7割弱が「英語での電子メールなどの書き方を学ぶ」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた(表12を参照)。

表13 英語でのプレゼンテーションのやり方を学ぶ

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	22.2	131	33.3	3	37.9	11
少しあてはまる	36.5	216	22.2	2	24.1	7
あまりあてはまらない	27.1	160	44.4	4	24.1	7
あてはまらない	14.2	84	0.0	0	13.8	4
合計	100.0	591	100.0	9	100.0	29

学生の約6割弱が、教員の約5割が、さらに、卒業生の約6割が「英語でのプレゼンテーションのやり方を学ぶ」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた(表13を参照)。

社会科学系の大学生，教員，および卒業生を対象にした英語学習に関するニーズ分析

表 14 ビジネス関係の英語を学ぶ

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	36.6	217	22.2	2	53.6	15
少しあてはまる	39.3	233	55.6	5	10.7	3
あまりあてはまらない	17.9	106	22.2	2	17.9	5
あてはまらない	6.2	37	0.0	0	17.9	5
合計	100.0	593	100.0	9	100.0	28

学生，教員，卒業生ともに約 6～7 割が「ビジネス関係の英語を学ぶ」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表 14 を参照）。

表 15 英語での電話の対応の仕方を学ぶ

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	25.1	148	22.2	2	51.7	15
少しあてはまる	41.1	242	22.2	2	13.8	4
あまりあてはまらない	25.8	152	55.6	5	17.2	5
あてはまらない	8.0	47	0.0	0	17.2	5
合計	100.0	589	100.0	9	100.0	29

学生の約 6 割が，教員の約 4 割が，さらに，卒業生の約 6 割が「英語での電話の対応の仕方を学ぶ」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表 15 を参照）。

表 16 海外の学生との交流

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	14.6	86	33.3	3	51.7	15
少しあてはまる	28.4	167	33.3	3	20.7	6
あまりあてはまらない	36.2	213	33.3	3	20.7	6
あてはまらない	20.7	122	0.0	0	6.9	2
合計	100.0	588	100.0	9	100.0	29

学生の約4割が、教員の約6割が、さらに、卒業生の約7割が「海外の学生との交流」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表16を参照）。

表17 TOEICに関する試験対策

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	53.9	319	33.3	3	39.3	11
少しあてはまる	32.3	191	55.6	5	10.7	3
あまりあてはまらない	9.1	54	11.1	1	35.7	10
あてはまらない	4.7	28	0.0	0	14.3	4
合計	100.0	592	100.0	9	100.0	28

学生の約8割が、教員の約8割が、さらに、卒業生の約5割が、「TOEICに関する試験対策」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表17を参照）。

表18 文法を学びなおす

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	49.3	292	55.6	5	37.9	11
少しあてはまる	39.7	235	44.4	4	27.6	8
あまりあてはまらない	7.4	44	0.0	0	24.1	7
あてはまらない	3.5	21	0.0	0	10.3	3
合計	100.0	592	100.0	9	100.0	29

学生の約9割弱が、教員の全員が、さらに、卒業生の約6割が「文法を学びなおす」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表18を参照）。

社会科学系の大学生，教員，および卒業生を対象にした英語学習に関するニーズ分析

表 19 英語でコミュニケーションを行う

	学生		教員		卒業生	
	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数
あてはまる	31.2	184	77.8	7	64.3	18
少しあてはまる	39.6	233	11.1	1	21.4	6
あまりあてはまらない	21.6	127	11.1	1	3.6	1
あてはまらない	7.6	45	0.0	0	10.7	3
合計	100.0	589	100.0	9	100.0	29

学生の約7割が，教員の約9割弱が，さらに，卒業生の約8割が「英語でコミュニケーションを行う」に関して「あてはまる」または「少しあてはまる」を選択していた（表19を参照）。

学生の自由記述式の回答

学生に対する質問紙に「どのような英語の授業を受けたいですか」という質問項目を設けた。以下は各カテゴリーの回答例である。

英会話・話す授業（32名）

- ・コミュニケーション能力が上がる授業

楽しい（20名）

- ・英語に対して苦手意識をもたず，英語が楽しくなるような授業

実用的英語（16名）

- ・社会に出た時に本当に役に立つ英語力を身につけられるような教育を受けたい

映画（10名）

- ・映画と結びつけた授業がやりたいです

外国人との交流（8名）

- ・ネイティブ学生との交流

TOEIC（8名）

- ・TOEICの点をあげる。

基礎（6名）

- ・基礎から学びたい

ビジネス英語（5名）

- ・仕事に役立つようなビジネス英会話を勉強したいです

文法力（5名）

- ・英文法をもう一度復習して身に付ける授業

教員の自由記述式の回答

教員に対する質問紙に「本学の学生にはどのような英語教育を行うべきであると考えていますか」という質問項目を設けた。以下は各カテゴリーの回答例である。

コミュニケーション力 (3名)

- ・将来、英語を使って働く機会があった場合に自らすすんで訓練を受けるようなモチベーションや自信が持てるよう、基礎力とともにコミュニケーション力を付ける方針が適当なのではと思います。
- ・対人コミュニケーション能力を養成する授業を提供すべきだと思います。
- ・同僚や部下に外国人社員が含まれていても管理職として適正に対処できる程度の英語力と英語力以外のコミュニケーション能力（世界の文化・歴史・背景を知っている）を持ってほしい。

文法力 (2名)

- ・上級クラスの学生には専攻分野に関する英語や、英字新聞、インターネット、映像などを用いた英語学習を行うことは良いと思いますが、中級クラス、下級クラスの学生には基本的な英文法から学習しなおす必要があると思います。
- ・中学生レベルの英文法から教えるべきである（量をとにかく増やす）。

ビジネス関係 (2名)

- ・多くの学生がビジネスやサービス業に従事することを踏まえると、それらに関連する英語教育の必要性が指摘されます。
- ・会社に就職したり、司法・経済・経営の専門的な機関で働いたり、社会で役立つ人間になるために、大学卒業者として最低限の英語力をそなえられるような教育。質問に答えてみて、現代社会の多極化が実感されました。質問項目の全てが同じくらい重要に感じられましたが、英語の構造・語彙・情報や知識を身につけ、自分の意見を発信する力を養成するような教育が必要だと思います。

その他の意見

- ・将来に備え、英語を学ぶことに対するハードルを低くして卒業させてあげたいと思います。英語に関しては、自分はやればできる、という自己イメージを作るお手伝いをしたいと思ってクラスを運営しています。

卒業生の自由記述式の回答

卒業生に対する質問紙において「大学時代にどのような英語を学んでおくべきであったとお考えですか。自由にお書きください」という質問項目を設けた。以下は各カテゴリーの回答例である。

社会科学系の大学生，教員，および卒業生を対象にした英語学習に関するニーズ分析

実践的なビジネス英語（3名）

- ・会社の留学制度（大学院）に対応できるだけの英語力が身につけば申し分ありません。そこまでは無理かもしれませんが、海外勤務に対応できるか、又は海外出張に対応できること、最低でも来客や電話に対応できなければ大手企業ではかなり肩身が狭くなります。そういったランク別の目標設定ができれば実戦向きかもしれませんね。
- ・入試のための英語と、実践（ビジネス）英語は違うので、ビジネス向けの英語をやっておいてもよかったかなと。
- ・ビジネス英語と言うととかく英字新聞の読み方とか英語を理解することに満足しがちだが、実際は英語の頭で理解し、解釈し、表現することが大事。ディベートやプレゼンテーション、交渉事といったシミュレーションをもっとすべきだと思う。

英会話（6名）

- ・高校の教科書の延長のようなものではなく、コミュニケーションを中心とした英語を学んでおけばよかったと思う。
- ・聞いて会話ができる。
- ・半年でも留学しておけば、日常会話が出来ていたと思う。
- ・英語での実践会話を学んでおくべきだった。
- ・英文法より会話力が必要。英会話をもっと学ぶべき。
- ・英会話、トップが外国人ですから、必要性を痛切に感じています。

その他の意見

- ・英語に限らず、コミュニケーション全般を学べる場があると良いのではないのでしょうか？現在の閉塞感にはコミュニケーション不足（下手？）にも一因があると感じています。特にここ最近の新卒生は総じて「真」のコミュニケーションではなく、うわべのコミュニケーションになっている傾向が見受けられます。どう他人（上司、先輩、同僚）と本音で話しができるか、飛び込んでいけるか、この辺りが必要なのではないのでしょうか。
- ・話す、聞く、書けるといった基本を身につけておきたかった。
- ・洋書に親しむことが必要であったように思う。

考 察

最初にリサーチ・クエスチョン1「学生が卒業までに身に付けたい英語能力，教員が卒業までに身に付けさせたいと考えている英語力，および卒業生が職場で必要としている英語力はどのようなものであり，さらに三者間にはどのような相違点が見られるであろうか」について検討していく。

「身に付けたい英語能力」に関しては、学生の約8・9割はすべての英語能力を必要であると感じており、また、和英翻訳以外の英語能力をほとんどの教員が必要であると感じていることが明らかになった。すなわち、Kikuchi (2005) は、学生と教員との間に英語学習に対する認識の違いがあることを指摘しているが、本研究では「身に付けたい英語能力」と「身に付けさせたい英語能力」に関しては学生と教員に大きな相違は見られなかった。

一方、学生・教員は卒業生といくつかの相違点が見られた。卒業生に対しては「身に付けたい英語能力」ではなく、彼らの職場で必要な英語能力を尋ねたため、全体的に学生・教員よりも「あてはまる」「まあまああてはまる」に回答した割合が低い傾向（4割から6割）が見られた。特に、「文法力」に関してはその傾向が顕著であり、学生の9割以上、教員は全員が必要であると感じているのに対して、卒業生は約4割しか現在の職場で必要であると感じていなかった。また、学生および教員の自由記述式の回答においても文法に関する記述がいくつか見られたが、卒業生の回答には見られなかった。ここ近年、中高等学校の英語の授業では文法を教えるよりもコミュニケーション重視の授業が行われており、さらに、ゆとり教育の影響により英語を含めた基礎学力が不足している学生が多く入学してくるようになったといわれている（甲田，2011）。そのため、大学に入学してくる学生の中には文法の基礎が不足している学生が多く見られるようになり、もう一度基礎から文法を学び直したいと感じている学生が以前より増えてきているように思われる。すなわち、卒業生の時代には文法力が十分にある学生が多かったために、卒業生は文法力の必要性をあまり感じていないのではないかと推測できる。

つぎにリサーチ・クエスチョン2「学生が受講したいと思っている英語の授業、教員が行うべきであると考える英語の授業、および卒業生が大学時代に受講したかった英語の授業はどのようなものであり、さらに三者間ではどのような相違点が見られるであろうか」について検討していく。

第一に、「英語でコミュニケーションを行う」に関しては学生、教員、卒業生のほとんどが「あてはまる」「まあまああてはまる」を選択した。また、自由記述式の回答においても学生、教員、および卒業生ともにコミュニケーションや英会話に関する記述が多くみられた。すなわち、コミュニケーション力を高めるような英語の授業が学生・教員・卒業生ともに必要であると感じているといえるであろう。また、「ビジネス関係の英語を学ぶ」においても学生、教員、および卒業生の約6～7割が「あてはまる」「まあまああてはまる」を選択していた。自由記述式の回答においても、学生、教員、および卒業生ともに卒業後に役立つ実践的な英会話やビジネス関係の英語に関する記述が多く見られたことから、社会科学系の学部においてはコミュニケーション力を高める実践的なビジネス関係の英語を積極的に取り入れていくべきであるといえるであろう。

第二に、卒業生の約7割が「海外の学生との交流」において「あてはまる」または「少し

社会科学系の大学生、教員、および卒業生を対象にした英語学習に関するニーズ分析

あてはまる」を選択していたのに対して、学生は4割程度であった。一方で、多くの学生と教員が「TOEICに関する試験対策」と「文法を学びなおす」を望んでいるのに対して、卒業生は5・6割程度であった。TOEICに関してはその必要性が大学で叫ばれるようになったのは最近であり、卒業生が大学に在籍した頃とは事情が異なるため、このような結果になったのではないかと推測できる。また、上述したように、ゆとり教育やコミュニケーション重視の影響により中高等学校で学ぶべき文法の知識が十分でない学生が増加してきたことにより、以前よりも文法を学び直す必要性を教員のみならず学生も切実に感じているのではないかと思われる。

おわりに

社会科学系の学部に属する学生、彼らに英語を教えている教員、および卒業生を対象に英語学習に対するニーズ分析を行った結果、コミュニケーション力を高めるような英語の授業やビジネス関係の英語を学ぶ授業を学生・教員・卒業生ともに必要であると感じていることが明らかになった。一方、いくつかの相違点も見られた。学生・教員のほとんどが「文法力」を高める必要があり、英文法を学び直す授業が必要であると思っているが、卒業生は職場において「文法力」はあまり必要がないと感じていることが明らかになった。また、「TOEICに関する試験対策」に関しても多くの学生・教員は必要であると回答しているが、卒業生は必要であると回答したのは半数程度であった。すなわち、学生と教員間での英語学習に対するニーズには相違点はあまり見られなかったが、卒業生の職場の状況や卒業生の考えとは異なることが明らかになった。しかし、卒業生の調査対象数が少なかったために、今回の結果を一般化することは難しい。ゆえに、職場での英語使用の状況をより正確に把握して卒業後に即戦力になるような学生を養成していくためには、より大規模な調査が必要であろう。

謝辞

本研究は、2012年度の東京経済大学個人研究助成費（研究番号12-08）を受けた研究成果である。

引用文献

- カレイラ松崎順子. (2009). 「保育士養成課程の学生に対する英語学習に関する調査—— English for Specific Purposes (ESP) の視点から——」『JALT Journal』 31, 65-86.
- 深山晶子 (編) (2000) 『ESPの理論と実践』 東京：三修社.
- Kaewpet, C. (2009). Communication needs of Thai civil engineering students, *English for*

- Specific Purposes*, 28, 266-278
- Karimkhanlouei, G. (2012). What do Medical Students Need to Learn in Their English Classes? *Journal of Language Teaching and Research*, 3, 571-577.
- Kikuchi, K. (2005). Student and teacher perceptions of learning needs: A cross analysis. *Shiken JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter*, 9, 8-20.
- 甲田直喜 (2011). 「リメディアル教育における文法項目の誤答調査と到達度目標」『淑徳短期大学研究紀要』50, p.225-240.
- 中野秀子 (2005). 「ニーズ分析と教材開発」『ESPの研究と実践』4, 51-60.
- Richards, J. C. (2001). *Curriculum Development in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 清水裕子・小山由紀江 (2001). 「工学系大学卒業生の英語ニーズ分析」『立命館経済学』50, 388-405.
- 清水裕子・松原豊彦 (2007). 「経済学部卒業生の英語使用に関するニーズ分析」『立命館経済学』56, 169-181.
- 寺内 一 (2005). 『ビジネス系大学の英語教育イノベーション——ESPの視点から』東京：白桃書房.
- 吉重美紀 (2005). 「大学の共通教育に学生が求める英語力——工学部、水産学部、医学部1、2年生のニーズ分析から」『ESPの研究と実践』4, 111-121.